

令和6年度 第2回公立鳥取環境大学教育研究審議会 議事要旨

- 日 時 令和6年11月22日（金） 10:00～12:10
- 場 所 本部講義棟3階 大会議室（対面会議）
- 出席者 小林朋道委員、石井実委員、山口武視委員、植田紀子委員、
根本昌彦委員、張漢賢委員、吉田高文委員、今井正和委員
[8名/12名]
- 欠席者 足羽英樹委員、河井登志夫委員、宇佐美誠委員、中山実郎委員

【議事】

1 前回議事要旨の確認

原案のとおり承認された。

2 協議事項

(1) 令和7年度重点取組事項（案）について

事務局から令和7年度重点取組事項（案）について説明があり、意見をいただいた。これらの意見を踏まえて、令和7年度重点取組事項（案）を修正することとなった。

〈主な意見等〉

- ・ 「全学サーバーシステム」の更新について何をするのか。クラウド化することによってどういうメリットがあるのか、何を目指しているのか教えて欲しい。
→これから進めていこうとしているところ。今までオンプロミスで大学に計算機を置いてマネージメントを大学の方で行ってきたが、ご承知の通りクラウドとか機械そのものを買うのが目的ではなく、そこのサービスだけを提供している業者がクラウドに表れてきている。それをうまく使って行った方が良いんじゃないかと。そうすることによって結果的には、大学内に計算機のマネージメントをするための要員が必要であったのが、お金でサービスだけを購入することが出来る。そのように変化してきている。全学サーバーシステムがちょうど更新時期に来ているので、全部を外に出すというのもやりようではあるかもしれないが、それも含めて今後検討していきたい。
- ・ 前職で学術情報センター長を務めていたが、ハッカーが多くて、それを防ぐ事がコストになっていた。データを何処かのハードに置いておくとアクセス性やコスト面の問題があり、自分で情報を守る必要が生じる。それを外部委託にして、クラウドに載せれば、世界中どこからでもアクセスできるという利便性がある。問題はオープンサイエンスの時代になって、収集中のデータであったり公表論文に付随する巨大なデータというのも学術研究機関が保管しなければいけない時代になっている。そうするとクラウドのメモリー料金が嵩んでくる。それで安全性は確保できるが、結構コストがかかる。クラウド化は当然すべきであるが、オープンサイエンス対応の大容量確保、保存データのセキュリティ対策、多分学生情報は入れないと思うが、どのような安全性を確保するのが課題である。
- ・ 「学習者本位の教育」というところで今、文科省をはじめとして言って来ている。何を教えたかではなく、何が学べたかということだろうと思うが、そのためにはやはり教育改善がとてども大事になると思われるなかで、この「効果的なFD等により」というところで、例えば今年度どのような取り組みをされたのか教えて欲しい。もう1つ「グローバルな視点」というところで、「英語能力育成」というところで、英語力の習得に向けて英語力の評価をどのように図っているのか。

→今年も、FDに加えてSDも一緒にやっていくということの一部をやっている。FDについては、今年もアクティブラーニングをもう一度改めて学び直そうということで先日第1回のFDを開催し、それに先立って各教員にアンケートを実施し現在の授業にアクティブラーニングをどのように取り入れているのか調査をし、その結果を共有するとともにワークショップを開いて取り組んでいる先生とそうでない先生を組み合わせるような形でグループを作って議論してもらって、それをまた共有して発表してもらおう事を行った。次は外部の専門家を招いてもう一度開催する予定である。

学生の成長だけに焦点を当てたものではないが、カリキュラムワーキングを昨年度からカリキュラムと魅力づくりのワーキングを立ち上げた。成長ということ文科省は簡単に言っているがなかなか難しいところである。何を以て成長とするのか。一般的には専門性というものもあると思うが、もう一つは汎用的などうか鳥取大学では、「人間力」と言われているが思考力であったりとか協働する力であったりとかそういう人としての生きる力というものもあると思う。そういう意味では学生が自ら何か取り組んでいくようななかで、それが地域の中で例えば単に地域の状態を知るとか、技術を知るとかだけではなく、その中でいろんな人との繋がりや、いろんな事を考え、問題点を自分なりに理解を深めて、そういう体験とか、或いは今学生による魅力づくりという事も考えている。やはり欠けているのは、自分たちで発想して、企画して実行するという力も入ると思う。そういう意味で特に学生が自分でやりたいと思う気持ちも伴いながら、主体的に動くという事が大事だと思う。言葉でいうのは簡単だが難しいものがある。そういう活動を増やしていきながら人間としての成長も育てていきたい。出来るところからやっている。

- カリキュラムの成果の見える化は、やっていると思うがこれからどう評価していくかというところでFDとか教員の評価とか学生のためになっているのかどうかという評価もきちんとやって行かなくては行けない。それと色々な所に出て行ってとか、生き物を育てるとかというところを見える化してあげると良い。学生にとって成長実感は何らかの見える化をしてあげないと行けない。環境大学が例えば成長という言葉キーワードに教育をするのであればこういったところをやれば成長したと実感できるような取り組みをしていただきたい。
→まだ本格的にはやっていないが、学生自身がどう考えるか、能力をカテゴリーにして、今カリキュラムワーキングでやっているのは、見える化、まだ案の段階だが、12のカテゴリーに分けて学生自身に自分はどうかを振り返ってもらう。数値化して自分で評価する。それをチューターと見合わせながら話をする場を作る。そういうことを一つは考えている。
- 見える化は、例えば学生を表彰したりすると喜ぶので、成長実感が湧くんじゃないかと思う。英語力は、TOEICか何かを使っているのか。
→英検とかTOEICとかいろいろあるがCEFRを利用していた。CAN-DOリストみたいなものを考えてやってみたが難しかった。いろいろ検討していきたい。
- グローバルな人材育成は、これから重要で、卒業生は国際社会で活躍しないと行けない。他の国がどんどんそういう能力を高めた学生を出していく中で日本の学生の行き先が無くなったりする。前職の大学ではTOEICを使って能力試験をして、やはり一つのクラスの中で学生の能力にバラツキがあると教えるのが難しいという事があるので、能力別クラスを作って少人数教育をしていた。英語では例えばシェークスピアを教えますというのは止めて、英語能力のスキルアップのための教養課程の英語の授業を組み立てた。かなり思い切ったことをやった方が良い。
→本学は、開学時からコミュニケーション重視の英語という事で行っている。リーディング・ライティングのクラスとスピーキング・リスニングのクラスに分かれて行っている。海外に出ていくという事を考えれば、実際に行くのが学生にとって良い事なので、資格試験でお金を使うのと、そのお金をプールしてやる気のある学生を留学させた方が良いのか。後者の方が良い

と思うと話をしている。

- 学生にとって体験するのは大切なことなので、単位を出すかどうかは学校によって違っていると思うが、サマープログラムなどで海外の大学が持っているエクステンションコースに、旅行会社に委託するなどして1か月缶詰めで行かすのもよい。今なかなか海外に留学に行くという学生がいないのでは。エクステンションコースなら夏休みの旅行気分のようなものもあるので、先ずは面白いところを選ぶのがよい。アメリカだったりイギリスだったりオーストラリアだったりそういう国の観光地にある大学を選ぶと結構参加者が多く行ってくれる。もう一つは、学生が海外に行かないので、逆に留学生に来てもらうという事を重視する。留学生が一人来て、クラスなり研究室に入るだけで国際化が起こる。安上りである。学生があまり留学しないので、エクステンションと留学生を呼ぶという事に特化していくのもよいのでは。
→英語村は10数年行っていて、ある程度授業とも連携させている。そのスタッフはアングロサクソン系だけではなく東南アジア系、南アフリカ系出身の方とか日本語がしゃべれない方とかもそろえている。疑似的な機会を提供している。新しい方が来ると刺激になるという効果はある。現在の留学等に関する状況は大学近況で説明。
- 資料は確認したが、参加人数が少ないと思う、二桁は欲しい。
それと起業だが、以前の経験では、大学生が地元の企業に行って何かを学ぶというのは当たり前だが、そうではなく地元の産業を起こす、新しい企業を作るという事をしないと地元と大学は共存共栄にならない。鳥取は事情が厳しいのでは。就職をさせたくても受け皿になる企業が無いと出来ない。そうすると鳥取県内に新しい企業、ベンチャーを作っていくという観点も必要ではないか。海外の大学の中にはそういうスタンスで大学の中にコースを作っているところもある。前職の大学ではそういう所に留学させて新しく起業するノウハウを英語で学ばせるプログラムがあった。その中でピッチトークやエレベータートークと言って、エレベーターでたまたま社長に出会った時に自分の研究がどんなに素晴らしいかを次の階に着くまでにアピールするという想定での練習もあった。1分以内に自分が今研究している内容がこんな製品に結びつき企業にとって有益だという事を社長にアピールするという練習を徹底的にして、学内でも時々ピッチトーク大会を開催して英語で自分の研究内容を発表し自分の英語能力を高めさせる企画があった。海外の大学でスタートアップのセンスを磨いてくる。学生はそれに倣って地元で新しい企業を起こす。自分が持っているシーズを製品化する事についてどうやって企業を引き付けていくのか。企業と連携しないといけないので社長などにアピールする能力がとても大切。英語でやらないといけない、海外企業とやらないといけないという事と絡めたら面白いかなと思う。英語に限らなくても日本語でアピールするのも良いと思う。
→なかなかハードルは高いと思うが、そういう発想は大事だと思う。それが大学の魅力づくりなり、学生の成長に繋がり、生きた体験になると思う。

3 報告事項

(1) 令和5年度及び第2期中期目標期間に係る業務実績評価について

事務局から、令和5年度及び第2期中期目標期間に係る業務実績評価について報告があった。

(主な意見等)

- 令和3年から県内向け学生の推薦を実施しているが、今年が4年目で就職になる時期であるが、そういう学生の内定段階ではあるが、県内への定着率はどのような状況になっているのか。
→Ⅲ型の県内出身者に限定した入試で、県内に就職しているという学生が圧倒的に高い。定員15名で過半数7~8割程度は県内に就職となっている。大学全体での県内への就職は17%くらいで、20%にちょっと届かない今の状況。県内出身者は県内に比較的多く入っている状況です。最終的な結果が出ましたらまた報告します。

- 例えば合否判定に地元貢献というのを謳って地域のために働きたいという学生が選考のなかで有るのか無いのか。
→そこを持って採点の際に加味するかということとは、やっていない。問題としては、入学を許可する以上、私たちも責任を持つ。根底には、学んで卒業するためにはそれなりの基礎学力が必要。そういう点では、なかなか意欲はあっても果たして卒業できるだろうか、なかなか単位が取れずにいる学生もいる。そういうことを総合的に考えると県内に残るという事だけを重視するわけにはいかない。
- スマートフォンアプリの利用については、何か問題があったのか。
→スマホのシステムというよりも、学生が応じてくれなかった事による。実際には年1回の避難訓練の時に全員参加というわけではなく1年生が大教室で集まっている時に実施するが、1年生は、避難訓練に参加してその時にスマホのシステムで確認を行っているが、上級生の参加が少ない。実際の時にどうするのが課題である。元旦の能登半島の地震の際は、学生数が少ないので、その地域の学生に個別に電話をして安否確認を行った。大規模校ではできないし、今回はたまたま地域が限定されていたので、そういう対応を行った。
- 100%でなければならぬ。むしろ99%であれば、残りの数名に対して、その人がどうして回答しなかったのか、何が原因だったのか確認する必要がある。必要な時に、情報を届けなければならない。
→大学でも授業評価アンケートなどもスマホを使って行っている。いろいろな学生への呼びかけに対して、なかなか反応してくれない。一つの問題である。大学によっては、アンケートに答えないと成績を出さないとということもあるようだ。出来れば学生の自覚・成長を促していきたいが苦戦している。

(2) 脱炭素先行地域づくり事業の計画変更について

事務局から、脱炭素先行地域づくり事業の計画変更について報告があった。

(主な意見等)

- バイオマス発電は、当初はどんな計画だったのか。
→大学でやった場合、夏期、冬季、春季の休業があり、継続して使って行かないとコスト的に採算が取れないというところもあり、今鳥取市の方で再検討しているのは、継続して使って行けるような所をとる事で本学ではなく別の場所を検討している。
- 大学のメリットは、何か。社会貢献とか仕組みが良く解らない。
→ZEB化も含めて大学本体の耐用年数とかの時期もあり、併せて検討した。資源を地域で利用すると地域の活性化にもなる。大学のアピールにもなる。大学の理念でもある「人と社会と自然との共生」今でいうとSDGs、持続可能な社会に合致している。18歳人口も減り公立大学も増えてきた厳しい状況の中で、本学の特色をしっかりと出していくという存続のための、そういう中で今回の取り組みというのは、本学をアピールするうえでもよいと考えている。

(3) 令和6年度補正予算の専決について

事務局から、令和6年度補正予算の専決について報告があった。

(主な意見等)

- 特に無し

(4) 教員の採用について

事務局から、教員の採用について報告があった。

(主な意見等)

- ・ 特に無し

(3) 近況報告

事務局から近況報告があった。

- ・ 「大学魅力づくりプロジェクト」は、授業科目の事だと思うが、選択とか必修とか、カリキュラム上はどのような扱いになっているのか。
→選択科目で集中講義扱いで1単位としている。今やっている「鳥取グリーンベンチャー」を少し形を変えて出発した。
- ・ 「大学魅力づくり」というネーミングについて、たかが名前であるがされど名前であるので、どのようなスタンスで単位を取るのか、インターンシップということであれば、学生は自分の為に行くという事になるし、大学魅力づくりとなると大学の片棒担ぐイメージを持ってしまって気乗りしないという部分もあるのではないかな。中間の何かいい名称があるといいかな。
→「大学魅力づくりプロジェクト」というのは、「カリキュラム検討ワーキング」と同じようなもので、概念を言っているわけで、それがAからJまでであるという事。「魅力づくり」というのは色々な意味があり、その中で学生が成長するという仕組みと、そういうことを本学がやっていることを外部にアピールするという2つの意味を持っている。この中には科目もあれば科目以外もある。
- ・ 岩美むらなかキャンパスというのは、環境大学が持っている施設ですか。
→日本交通から本学の学外の拠点施設として使ってくださいという事で借りている施設である。
- ・ 今、岩美は若い方に人気の高いスポットなので自前で持っているなら宿泊施設もあるようなのでそこを活用して経営しながら外部資金獲得できないかな、若い方の利用とか、海外からも結構来られて、台湾、中国、韓国とかアジアの国からも、ここを核にしてアジア地域の交流が深まることも出来ないのかと思ったが。
→現在は、本学の学生が利用しているのみであるので、参考とさせていただきたい。
- ・ 志願状況を見ると県内よりも県外が多いのは、これはすごいことですね。これは維持しないといけない。就職も今の時期ならこれくらいの内定率だと思います。面白いと思うのは、女子の内定率が高い。
→都会と違って地元の18歳人口は少なく、大学の存続の為にも外から来るのを増やしていかないといけない。目標値に県内入学率30%があるが、県内の18歳人口を考えると高い率になる。
- ・ 鳥取大学でも昔20%を切っていたので、感覚的には環境大学の30%は高いなと思う。
→以前、受験した学生は全部取れとか言われたこともあったが、しっかり成長させて卒業させていくという事もあるので、基礎学力も見極めて途中でドロップアウトされるのは、学生にとっても大学にとっても不幸なことだ。30%は、ちょっときついなという感想を持っている。
- ・ 一般的には少子化であるので、県外から学生が来なくなって経営が厳しくなるというパターンがある。
→地元志向はある。最近私立が入りやすくなった。費用をいろんな奨学金を使いながら国公立と変わらないような、或いは国公立よりも安くしている。そうなると必ずしも県外の公立に行かなくても地元の難関私立にというような動きもあって県外からの受験もやはり少なくなっている。
- ・ 今の受験のトレンドは、安・近・短になっている。そういう観点で言うと鳥取は来にくい。そういう意味で行きやすいのは太平洋側であったり都市に近かったりする大学だが、そこでこれだけ確保できるというのは、逆に解析すべきではないか、なぜこれだけ県外から学生が来てい

るのかと。

→鳥取にそういう要素があると思っている。遠く離れた北海道、沖縄からも来ている。偏差値の事もあるかもしれないが、向こうが選んでくれた。今後の経過も見ないといけないが、そのところをもう少し掘り下げて大学としても或いは県としてもこれから人口減の中で、若者にとっての魅力というのも重要な要素となってくるとしている。鳥取県の持つ特色は重要な点だと思っている。

5 その他

6 閉会